

「進化経済学会教育セッション」

進化経済学講義の構成と教育的ねらい

The composition of lecture on evolutionary economics and its educational aims

西部 忠（専修大経済学部生活環境学科）

Makoto Nishibe (Dept. of Econ., Senshu Univ.)

1. はじめに

専修大学経済学部はかつて「経済学科」と「国際経済学科」の二学科で構成されていたが、2年前に「経済学科」が「生活環境経済学科」と「現代経済学科」に二分再編され、三学科体制に移行した。専修大では「マルクス経済学」関連分野が一定の勢力を保っていたため、「生活環境学科」として分離独立し、「現代経済学科」となった「近代経済学」分野と棲み分けることとなったのではないかと考えられる。この再編に際して、進化経済学が経済学部の二つの学科、「生活環境学科」と「現代経済学科」で別々に講義されるという、きわめて稀な状況が生まれた。その結果として、西部は「生活環境学科」で「進化経済学1」（前期2単位）、「進化経済学2」（後期2単位）、吉田氏は「現代経済学科」で「進化経済学基礎」（前期2単位）、「進化経済学応用」（後期2単位）を担当している。

それぞれが「進化経済学1」で『進化経済学基礎』（通称「赤本」）、「進化経済学2」で『進化経済学応用』（出版予定、通称「緑本」）での執筆担当箇所を講義することにより自ずと棲み分けながら進化経済学を講義することとなった。以下、西部が担当する「進化経済学1」と「進化経済学2」の概要を紹介し、学部教育として進化経済学をどのような意図、目的、内容で教育しているかを説明する。

2. 講義概要

私は、学部で進化経済学の上記科目以外に、「経済原論基礎」、「経済原論」というマル経原論、「社会科学論1」や「社会科学論2」という経済学方法論、「貨幣論」や「地域通貨論」という貨幣制度論を担当している。「進化経済学1」と「進化経済学2」の講義はそれらとの関連を意識しつつ構成している。特にマルクス経済学における原論、経済学史、経済学方法論との関連、特に、「経済原論基礎」や「経済原論」との違いやそれとの接続、および「生活環境学科」の学科名との関連をより重視している。

まず、参考までに「進化経済学1」と「進化経済学2」のそれぞれ15回分の講義目次を【表1】に示す。「進化経済学1」は、『進化経済学基礎』の全般的解説（第2章モデルの相性、経済学方法論、第5章モデル部分を除く）を行い、「進化経済学2」は『進化経済学応用』で論述される、進化経済学が「経済学と経済の共進化」モデルとして自己生成・変遷することを考察する経済学であることを強調し、いくつかの分析枠やモデルの応用例として具体的事例を示している。

経済学の各学派（主要三潮流）が特定の時間・場所において生成し、その勢力を変化させながらも並存し続けるという「経済学の進化」と、現実の国家・地域経済が、技術、経済体制、経済制度、経済政策、規範・文化・価値の違いに基づき異なる発展段階や多様性を示しながら変化する「経済の進化」は対応関係にあり、両者が相互作用しながら歴史的に変遷してきた。「進化経済学2」は、このように経済学と経済が相互作用してループを形成しながら発展してきたダイナミクスを考察する。

まず、「経済学の進化」では、経済学の主要三潮流（①古典派、②新古典派、③歴史・制度派）の理論的な主眼（①労働価値と再生産、②効用価値と希少性、③規範・慣習等の制度的多様性、歴史的経路依存性）と、それらの時期・地域、思想・政策等の歴史的背景（①先進国英国の自由（帝国）主義・自由貿易、②先進国英仏圏での自由（帝国）主義的拡大と経済成長・富裕化、③後進国独米の保護貿易、幼稚産業保護と社会政策）が対応関係にあることを見た上で、古典派や新古典派との異同、歴史・制度派の問題提起を説明して、進化経済学への接続を図る。

進化経済学は主に①古典派と③歴史・制度派を統合するアプローチ（②もある程度含む）と結論づける。その中にマルクス、ケインズ、ハイエク、シュンペーター、ヴェブレンらを含めることで、②新古典派では見られない経済の現実的な諸問題、すなわち、経済の不均衡・不安定性（失業、倒産、金融破綻）、不平等（結果としての経済格差・貧困）、不公正（ゲームルールとしての制度・政策の恣意的・事後的な改変）をよりリアルに分析・記述することができる。進化経済学は方法論的にはMSRP、哲学的には批判的実在論の指向性を持つアプローチである。

次に、「経済の進化」では、時間の不可逆性や人間能力の限界という根本条件からルール／プログラムベースの認知・意思決定・行動（合理的主体の最適化でなく）を導入し、それに基づく「マイクロ・メゾ・マクロループ」という普遍モデルから、制度の自生的形成・変異・混合・群遷移を含む進化ダイナミクス（均衡の存在・安定（ゲーム理論ナッシュ均衡を含む）よりもずっと広い）をとらえる。そこから、資本主義市場経済の再生産における安定・不安定（収束・発散）だけでなく変動（定常循環、カオス）や相転移、経路依存性や履歴効果が分析でき、体制・制度的な多様性とそれらの混合、そして、それらのポピュレーションの相対頻度の変化による全体構造の変遷が理解できる。

こうした分析視点をとることで、経済の進化は、GDPの量的成長だけでなく、制度の多様性と変化を伴う質的変容を意味すると理解できる。現代経済の進化として、グローバル化や脱工業化、情報化とサービス化というトレンドに着目し、デジタル化と知的財産権拡大、情報財のクラブ・コミュニティ内共有化（YouTube、SNS、サブスクリプション）、ロボットやAIの導入による産業・雇用・生活の変化、コミュニティや文化の多様性を分析する。

現代経済では、脱工業化（情報化とサービス化）に伴って価格、貨幣、市場、会社等の制度が大きく変化しつつある。進化経済学はそうした新たな現実フィットした理論を形

成する必要がある。Amazon のサブスクリプションにおけるデジタル化された書籍や動画の場合のように、貨幣の予算制約よりも、それを利用視聴する時間制約がより重要になってきている。そこから、情報をベースとする価値論として「情報利用時間価値説」を説明する。また、マクロ的な経済成長論やトップダウンの経済政策論だけでなく、ミクロ・メゾ・マクロの各レベルにおける経済幸福論やボトムアップな意識・行動変容を可能とするメディアデザイン（自然環境、エネルギー問題を含む SDGs 等のミクロガイドライン指標、GNH 等の代替マクロ指標等、QOL 等の人間の幸福意識や価値観を含めた新しい制度設計・生成論）が求められている。これらは、進化経済学の新たな政策論だと考えられる。こうした総合的な視点から現代的潮流にも着目しつつ、人間生活や自然・社会環境における幸福 well-being を高める経済社会の実現を考える必要がある。

ミクロ・メゾ・マクロループの具体事例として、戦後日本に特徴的な経済・経営システム（法人資本主義経済と日本的経営）の進化を説明します。また、制度生態系や進化主義的政策論の具体事例として、暗号通貨や地域通貨を含む貨幣制度生態系の進化を解説している。

3. まとめ

吉田氏の講義が新古典派理論に代替しうる体系的モデルを提示することを重視するのに対して、西部の講義は、進化経済学を経済学の全体配置の変遷のなかに総合的・統合的に位置付け、それが世界経済の歴史推移に対応していることを示すとともに、経済学の理論・政策・思想と経済の技術・体制・制度が世界史の中で相互作用し、時期・地域ごとの差異を内包し、多様性を維持しながら発展してきたことを重視している。

両者が進化経済学の内容を棲み分けつつ相互に補完関係を形成することで、新古典派が主流である近代経済学への批判をより実在的・体系的な代替モデルを提示することで示すとともに、古典派を継承するマルクス経済学との接続を図り、古典派や新古典派の自由競争、自由貿易に基づく単一の経済理論・政策に対する歴史制度派の地域・時代における制度的・政策的差異や変遷という視点を内包することで、進化経済学をより体系的かつ包括的な統合理論として示すことが目指されている。

日本の経済学研究・教育は、「マルクス経済学 vs 近代経済学」という派閥的な制度構造を残しながら、後者が前者を排除して支配的になる傾向が強まっている。このような経済学研究・教育の一元化という現実の中、既存のミクロ・マクロ経済学や経済原論のような基本科目を習得した学部学生がそうした理論・政策論の前提や含意に疑問を感じ、また、現実の経済で起きている諸問題や新たな動向に興味や関心を持つことも少なくない。そうした学生に進化経済学を理解してもらうには、進化経済学が既存の経済学の歴史や経済の現実のあり方とどのような関係があるのか、進化経済学がどのような点で既存の経済学の拡張ないし一般化であるのか、そして、なぜ制度の多様性と進化に焦点を当てた包括的な統合理論が必要なのかをわかりやすく説明する手法や工夫が必要である。それは、私

の講義では、進化経済学が経済理論とは別の科目とされる経済学史の大きな枠組みや流れを包含していることを示し、制度の多様性や進化を現実的に理解できる現代的事例を提示することである。

【表1】

<進化経済学1>

1. 根本条件:時間の不可逆性と人間能力の限界
2. 秩序形成におけるルールと制度の不可欠性
3. 基礎概念:複製子と相互作用子
4. 入れ子型の主体:人間, 集団, 企業, 産業, 国家
5. 事例:証券取引所, 会計制度, 産業発展と産業政策の共進化
6. 経済の定義(希少性, 再生産, 歴史・制度)
7. 調整制度(市場(交換), 共同体(互酬), 国家(再分配))とグローバリゼーション(市場の拡大, 共同体・国家の縮小)
8. 貨幣生成(商品貨幣, 信用貨幣, 象徴貨幣)と貨幣機能(流通手段, 価値尺度, 価値保蔵, 流動性)
9. ストックとしての貨幣と在庫の意義: 緩衝, 切り離し, シグナル
10. 「マイクロ・メゾ・マクロループ」と事例(戦後日本経済の進化)
11. 産業, イノベーション, 国家経済, 国際経済, 移行経済
12. 制度生態系と事例(貨幣制度生態系)
13. 進化経済学の政策論(マクロ経済政策, 意識改革, メカニズムデザイン, メディアデザイン(コミュニティドック))
14. 授業内テストと総括・講評
15. 経済と経済学を進化的視点から見ることの意義(講義レビュー)

<進化経済学2>

1. 進化経済学は経済だけでなく経済学の進化も対象とする:「経済学の進化」と「経済の進化」の共進化
2. 多様な経済学方法論(実証主義, 反証主義, MSRP, 批判的实在論, 唯物史観)
3. 進化経済学の方法論(経済学者のヴィジョンと公衆の世論の導入による「経済学と経済」のループの形成, 唯「知」史観)
4. 「経済学の進化」:主要三学派(古典派, 新古典派, 歴史制度派)の進化的総合(マルチ理論ミックス)
5. 主要三学派①:「古典派」の理論, 政策, 時代・国(労働価値と再生産, 自由貿易・自由帝国主義, 先進国英国)
6. 主要三学派②:「新古典派」の理論と背景(効用価値と希少性, 自由帝国主義拡大, 経済成長・富裕化, 先進国英仏墺)
7. 主要三学派③:「歴史制度派」の理論と背景(社会文化固有価値と発展段階, 多様性と後進性, 保護貿易, 幼稚産業保護と社会政策, 後進国独米)
8. 進化経済学の経済学者:マルクス, ケインズ, ハイエク, シュンペーター, ヴェブレン
9. 「経済の進化」:各種レベルの「複製子」(経済体制(資本主義/社会主義), 技術(ICT, AI, ロボット), 制度(貨幣, 会社, 雇用, 国家), 政策, 規範・文化・価値)の多様な混合による変遷
10. グローバリゼーションと脱工業化(情報化, サービス化), 知的財産権・情報共有, 情報価値論「利用時間価値説」
11. ミクロ・メゾ・マクロループとその事例「戦後日本経済(法人資本主義)の進化」

12. 制度生態系とその事例「暗号通貨・地域通貨を含む貨幣制度生態系の進化」

13. 進化主義的制度設計とその事例

14. 授業内テストと総括・講評

15. 経済と経済学を進化的視点から見ることの意義（講義レビュー）

<教科書>

西部忠・吉田雅明他編著『進化経済学基礎』日本経済評論社

<参考書>

進化経済学会編『進化経済学ハンドブック』共立出版

西部忠「進化経済学の現在」(吉田雅明編『経済学の現在2』日本経済評論社所収)

西部忠編著『進化経済学のフロンティア』日本評論社

西部忠『資本主義はどこへ向かうのか』NHK 出版

西部忠『貨幣という謎』NHK 出版

西部忠編著『地域通貨によるコミュニティドック』専修大学出版局

西部忠『脱国家通貨の時代』秀和システム